
4. 文化としてのスポーツ

— スポーツとは何かを考える —

関 春南

スポーツをめぐる状況は今大きく変わろうとしている。しかし、その変化は、かならずしも、国民が求めている方向ではない。それどころか、文化としての発展にとって「危機的状況」とさえいわれる様相をはらんで進行している。そして、スポーツという文化の何をどのように継承し発展させていけばよいのかが、見えづらくなってきている。文化としてのスポーツを国民の立場から、科学的にとらえ直すことが重要な課題となってきた所以である。本稿はそれに迫るためのひとつの試論の概要である。

I. スポーツ論をめぐる状況

今日のスポーツ論をめぐる状況を、大胆に整理すると、およそ次のようになる。一方の極には、勝利至上主義的スポーツ論があり、これは、政治

主義と商業主義にますます深く浸潤され、人間の尊厳を無視した高度化推進の支えとなっている。他方の極には、トロプス論とかソフトスポーツ論があり、これは、科学技術の発展に対する、ひいては社会の発展に対する展望を失い、スポーツという文化の発展に懐疑的になり、スポーツ技術の高度化とスポーツの体系性を否定したところに新たな方向性を求めようとしている。

問題は、スポーツにおける技術のとらえかた如何にかかっている。

II. スポーツについての認識のあゆみ

ところで、振り返ってみると、われわれは、スポーツをこれまでいろいろなかたちでとらえてきた。つまり、われわれの対象把握の方法は一定の歴史をもっている。それを単純化していえば、要素的把握から構造的把握への変化であり、視点を変えれば、主観的把握から客観的把握への歩みとしてとらえることができる。例えば、「スポーツは、その基本的性格においてプレイである。そして、プレイのなかにアゴーンがある。さらに身体活動（運動）である、とするのが今日のスポーツについての一般的な考え方といってよい」（竹之下休蔵『プレイ・スポーツ・体育論』1972年）というように、スポーツを要素としてとらえたとらえかたに対して、「スポーツ」とは「身体運動の制御・表現」である（伊藤高弘「スポーツと現代」『若い世代と学問Ⅳ・芸術・スポーツと人間』1973年）という身体運動を軸にした構造的とらえかたが提起され、これが更に、本質・実体・現象という三層構造での把握によって深められていく。例えば、内海和雄（「スポーツに関する試論—その本質的特徴と把握の方法—」『科学と思想』26号1977年）も関 春南（「現代日本のスポーツ政策」『スポーツ政策』1978年）も三層での把握を試みていた。両者ともスポーツの実体として技術をとらえながらも、その本質においては、内海は、それを「自然的属性と社会的属性の統一」として、つまり、実体としての技術を、ある性質において説明したのにたいし、関は、身体運動の説明を軸に、スポー

ツの本質を、「主体と客体の弁証法的過程」ととらえた。（「権利としてのスポーツ理念」『国民教育』46号1980年）

いずれにしても、これらは、「スポーツであるか否かは、本人の心構え（Sinnrichtung）でできる」（カール・ディーム）といった主観的な対象把握から客観的実在としてスポーツをとらえていこうという営みであり、その限りでは前進であった。しかし他方では、スポーツのもつ固有の世界—純粋な営みとして展開する時間と空間—をどれだけ対象にそくして把握しえているか、という問題がだされてきた。つまり、「純粋な営み」というのは観念的であるから排除するというのではなく、むしろこのような主体的な契機をとりこんだうえで、客観的に説明していかなければ、対象を生き生きととらえていくことはできないことが明らかになってきた。つまり、スポーツという対象を主体的に把握することの要請である。言い方をかえれば、ホイジンガからカイヨワへと展開されてきた遊びの理論を観念論として切捨てたり、そこからの脱却をはかろうとすることではなく、それらを、われわれのスポーツ論のなかに、新たなかたちで蘇らせていくことが必要になってきているのである。

このような課題認識にもとづいて、「主体と客体の弁証法的な過程」としてとらえた持論のさらなる展開のスケッチを次に記しておく。

III. スポーツとはいかなる文化か

1. 労働の対概念としての遊びの一種

スポーツという文化は、物をつくりだすという目的をもった活動である労働とは異なり、具体的な物をつくりださない、「不生産的な活動」であり、つくることを目的としない活動、つまり「無目的的な活動」である。その意味ではこうしたものの総体である遊びの一種である。

遊びの一種であるスポーツは、身体運動を中核として構成されているが、その運動は人間の運動である以上自覚的であり、しかもその運動はある限定された時間と空間のなかにあることからして、

スポーツは「人間が意図的に、つくりだした時間と空間のなかでの自覚的な身体運動の営み」とひとまず言うことができるであろう。

そこで次の問題は、この「営み」をどのように内在的に説明するかである。

2. 4つのアスペクトでの把握

私はそれを4つのアスペクトでとらえたい。厳密には、4つ目の価値論的アスペクトをよりクリアにしていくために、先の現象、実体、本質レベルでの3つのアスペクトがあるといえる。

①第一のアスペクトは、「営み」の現象形態を、練習、試合、その成果としての記録の総体としてとらえる。スポーツの文化としての中核は、運動技術の獲得であり、そのためには、練習を不可欠としている。一方獲得された技術の程度は、試合という形式で表現され、客観的な位置を得ることになる。そしてこの結果は記録というかたちで成果として残されることとなる。つまり、これらの総体がスポーツなのである。

②第二のアスペクトは、「営み」の実体を、技術的過程と組織的過程との二つの基本過程から構成されているとみる。技術的過程とは、技術獲得の過程であり、運動の法則を認識し、それに適うように運動をつくりあげていく過程である。ここで主体と客体との弁証法的関係が主要には展開されているわけであるが、「人間の身体運動」であるがゆえに、不可避免的にこの過程のなかに、人間と人間との関係が入ってこざるをえない。これが組織的過程である。攻撃技術のフォーメーションからクラブの運営、連盟のありかた等さまざまなかたちで存在している。

③第三のアスペクトは、「営み」の本質を、スタティックなものとしてではなく、ダイナミックなものとして、つまり、過程としてとらえる。実体としての二つの過程を生み出している本質を、主体と客体の弁証法的な過程ととらえる。つまり、主体である人間が、客体（対象）に働きかけ、対象を変革・克服するとともに、主体である自己自身を変革し創造する過程としてとらえる。

この過程は、構造的には三つの契機からなりたっ

ている。つまり、身体運動そのものと、身体運動の対象と身体運動の手段である。人間の身体運動そのものとは、一定の方向性をもった目的意識的な身体活動であり、身体運動の対象とは、任意に選びだされた、あるいは設定された、自然的、人工的時間と空間であり、身体運動の手段とは、この対象を変革（克服）すべき使用される身体器官およびその延長としての用具などである。

④第四のアスペクトは、以上のように対象をとらえることによってはじめに浮び上がってくる価値論的アスペクトである。スポーツの価値は、二つにわけてとらえることができる。一つは、身体運動の欠如から生じる「現代病」の蔓延する現代社会にあって、身体運動を前提にしているスポーツは生命の維持、健康の増進という、人間の生存にとっての絶対的必要性にかかわっている。その意味で、「生存的価値」とでもいえるものである。二つは、ただ生物として生きるだけでなく、人間らしく生きる価値とかかわっている。つまり、主体である人間が、客体である対象に働きかけ、対象を克服すると同時に新しい自己自身を生み出す。これはまさしく、自己実現の過程であり、自己表出（Selbstbetaetigung）といわれている人間的自由実現の営みにほかならない。また、人間相互の交流と連帯感をもたらすこの「営み」は、「類」としての「人間性」の実現を保証するものとなっている。新記録は人間の未来の可能性の創造を意味し、「営み」の中で生み出され芸術美は新たな価値の創造を意味している。これらは総じて「人間的価値」ないしは「文化的価値」とよぶことができる。